

提 言

子どもたちに静かなる感動を

日暮 眞 (東京家政大学)

かつて私の尊敬する友人の一人から、次のような述懐を聞いたことがある。幼い日に読んだビクトル・ユーゴーの「ああ無情」や宮沢賢治の童話など心暖まる多くの文学作品を通して、幼い魂に語りかける物語の一コマ一コマが、現在の自分の人生観の土台になっているというのである。然るに、このような余韻と深さをもった文学作品が、最近の子どもたちの世界から姿を消そうとしている。現代の子どもたちにとっては、前述の文学作品より、テレビの方がはるかに大きなインパクトを与えている。そこでは絶叫と騒音が交錯し、血なまぐさい暴力行為や殺人など、殺伐とした場面が繰り返りひろげられる。そのほか、きわめて下劣なシーンが潮のように押し寄せてくる。このような状況の中に放り出されている現代の子どもや若者たちは、人生観についてゆっくり考える余裕も、そのための素材も、与えられないままに育っていく。

最近外来で出会ったひとりの小学生(5年生)が、知恵遅れをもつ同級生が算数の授業時間で指を使いながら一生懸命計算をしようとしている姿を目撃し、幼児期の自分の姿をオーバーラップさせて感激したという話をしてくれた。常日頃子どもたちに感動を……ということを願い、とくに質的に静かな感動をもっともっと与える必要を感じていた私にとり、久し振りにさわやかで将来に希望のもてる話を耳にして嬉しかった。



お祭り

写真提供 日暮 眞